

高崎町文化財調査報告書

第 2 集

さま や しき

様屋敷第1・2遺跡

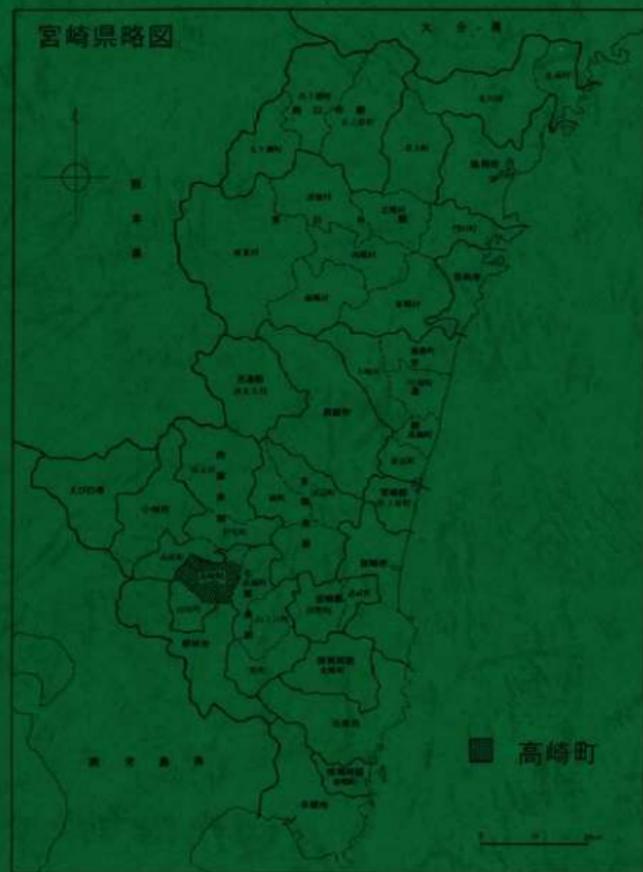
木 場 城 跡

1990年

きたもろかた たかざき

宮崎県北諸県郡高崎町教育委員会

宮崎県路図



正誤表

高崎町文化財調査報告書第2集

頁	行	正	誤
例 言		佐賀県立九州陶磁文化会館	佐賀県立九州陶磁文化館
2	13	開作したことであった。	開作したことのことであった。
5	10	四個の石	4 個の石
7~8	第5図		1 : 100
9	20	側が扶られた	側が扶られた
14	第13図	S A I	S A 1
17	表1	遺物番号6 砂粒を多含む	遺物番号6 砂粒を多く含む
17	表1	遺物番号15 広く光る	遺物番号15 白く光る
18	表4	遺物番号1 S A I	遺物番号1 S A 1
20	第19図		1 : 120
21	第21図		1 : 25,000
22	第22図		1 : 2,000

序

この報告書は、宮崎県北諸県郡高崎町教育委員会が昭和63年度に実施した大字前田にある様屋敷遺跡と大字繩瀬の木場城跡の緊急発掘調査の報告書であります。

様屋敷遺跡では、弥生時代の堅穴住居跡と江戸時代の建物跡が見つかりました。特に、これまで調査例の少なかった江戸時代の調査は貴重な資料となることでしょう。また、木場城では中世の山城に関する重要な発見がありました。この報告書が、今後の調査・研究に広く活用されれば幸いです。

終わりに、調査にあたり御指導・御協力を賜りました関係各位、地元町民各位に心から感謝申し上げます。

平成2年3月31日

宮崎県北諸県郡高崎町教育委員会

教育長　　向　田　一　男

例　　言

1 本書は、宮崎県北諸県郡高崎町教育委員会が谷川自治公民館及び高崎町土地改良区の依頼を受けて実施した様屋敷第1・第2遺跡の発掘調査報告書である。

また、林道工事に伴う木場城跡堅堀の調査結果についても掲載している。

2 発掘調査の組織は、以下のとおりである。

調査主体 高崎町教育委員会

教 育 長 向 田 一 男

社会教育課長 海老原 孝 幸

社会教育課参事 田 口 耕 一

調 査 員 県文化課主任主事 北 鮎 泰 道

3 本書の執筆・編集には、北郷が当たった。

4 発掘した遺物については、高崎町教育委員会において保管している。

5 遺構略号 SA・堅穴住居跡、SC・土坑

6 出土陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化会館大橋康二氏に御指導・御教示いただいた。

本 文 目 次

序

例 言

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯 1

第2節 遺跡の歴史的環境と地理的環境 2

第3節 発掘調査の経過と概要 4

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 様屋敷第1遺跡 5

第2節 様屋敷第2遺跡 10

第Ⅲ章 考察

第1節 繩文時代 19

第2節 弥生時代 19

第3節 江戸時代 19

付 章 木場城跡堅堀の調査 22

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 手捏ね土器実測図	2
第3図 遺跡分布図	3
第4図 繩文土器実測図(1)	5
第5図 遺構配置図(1)	7 ~ 8
第6図 銅鏡実測図	9
第7図 瓦実測図	9
第8図 軽石製加工品実測図	10
第9図 土層実測図	10
第10図 陶磁器実測図(1)	11
第11図 陶磁器実測図(2)	12
第12図 陶磁器実測図(3)	13
第13図 遺構配置図(2)	14
第14図 壺穴住居跡実測図	14
第15図 繩文土器実測図(2)	15
第16図 弥生土器実測図(1)	15
第17図 石器実測図	15
第18図 弥生土器実測図(2)	16
第19図 掘立柱建物跡及び柱穴断面図	20
第20図 掘立柱建物跡建筑工程推定図	21
第21図 木場城跡位置図	22
第22図 木場城跡縄張り図及び調査地点図	23

図版目次

- 図版1 様屋敷第1遺跡遠景
　　様屋敷第1遺跡調査風景
- 図版2 遺構検出状態遠景
　　遺構検出状態近景
- 図版3 遺構掘り上げ状態（掘立柱建物跡等）
　　遺構掘り上げ（土坑等）
- 図版4 掘立柱建物跡東柱穴列
　　掘立柱建物跡西柱穴列
- 図版5 掘立柱建物跡東柱穴列
　　掘立柱建物跡西柱穴列
- 図版6 掘立柱建物跡柱穴
- 図版7 SC2検出状態
　　SC3検出状態
- 図版8 SC1及び焼土検出状態
　　SC4検出状態
- 図版9 SC4陶磁器一括出土状態（遠景）
　　SC4陶磁器一括出土状態（近景）
- 図版10 様屋敷第2遺跡遠景
　　様屋敷第2遺跡近景
- 図版11 土層の状態
　　遺物出土状態
- 図版12 竪穴住居跡及び遺物出土状態
　　竪穴住居跡検出状態
- 図版13 木場城跡第1竪堀検出状態
　　木場城跡第3竪堀検出状態
- 図版14 出土遺物
- 図版15 出土遺物
- 図版16 出土遺物
- 図版17 出土遺物

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

様屋敷遺跡は、高崎町大字前田字鳥越前を中心とした縄文時代から江戸時代にかけての集落跡である。地元での伝承で「殿様の屋敷」という意味で「さまやしき」と呼ばれる地域であることから、遺跡名を様屋敷としている。

発掘調査は、本報告の地点を含み、3次にわたり調査区を設定し実施している。第1地点が谷川公民館建設予定地で、第2地点が農道建設予定地で、第3地点がバイパス建設予定地である。この内、第1地点は第2・第3地点からおよそ400m 離れており、独立の遺跡として扱う方が良いため、これを様屋敷第1遺跡とし、第2・第3地点を様屋敷第2遺跡とする(第1図)。なお、第3地点のバイパス建設予定地点は、県教育委員会主体の発掘調査であり別に報告書が刊行される。

様屋敷第1遺跡については、字鳥越前340番地15に谷川公民館が新築される計画が提出され、分布調査を実施した結果土器片の散布が見られたほか、伝承による屋敷跡の可能性が考えられた。町



第1図 遺跡位置図(縮尺1:10,000)

1. 様屋敷第1遺跡 2. 様屋敷第2遺跡

教育委員会においては、公民館建設の必要性に鑑み、遺構に対する影響を最小限にとどめるため発掘調査を実施し、盛土により公民館を建設することとし、昭和63年8月1日から8月17日まで発掘調査を実施した。

一方、様屋敷第2遺跡については、高崎町土地改良区より大字前田235番地に農道建設の計画が提出され、分布調査の結果弥生土器片の散布が確認されたため、町教育委員会において平成元年2月27日から3月4日まで発掘調査を実施した。

第2節 遺跡の歴史的環境と地理的環境

様屋敷第1遺跡は、独立丘陵状に高崎川の右岸に存在する高崎城と高崎川を挟んで左岸に位置する。現況は、周囲の水田面から約2mの比高差で残された約1,600m²の標高約16mの平坦地であるが、地元の人々の話によると、もともと平坦面の広がりはより広域であったが、水田開発の際に開拓したことであった。その際出土したという手捏ね土器（第2図）が保管されている。

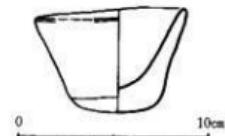
様屋敷第2遺跡は、第1遺跡の西北西約400mにあり、高崎川に向かってやや急な南向きの標高約168mの傾斜地に立地する。調査対象地の東側はすでに宅地として地下化されているが、西側の畠地部分に遺跡は広がるものと考えられている。

様屋敷第1・第2遺跡で検出された遺物は、おおむね縄文時代晚期、弥生時代後期、江戸時代後期の3時期に限られているといえる。ここではその3時期についておまかに触れておきたい。

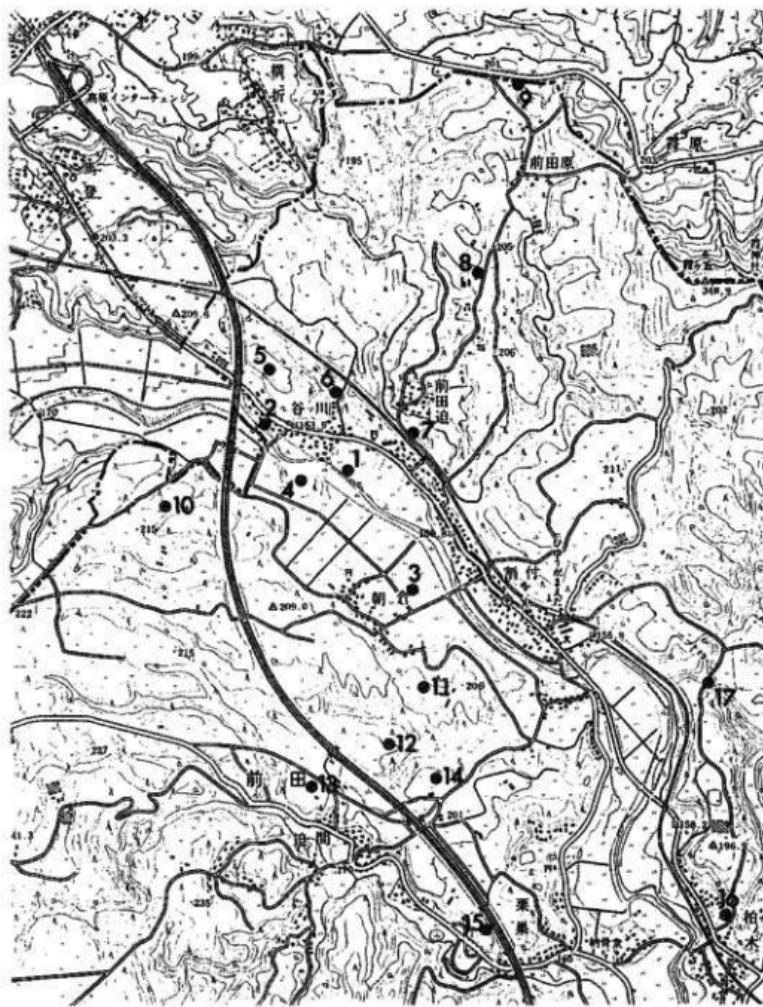
第2遺跡の北側は、国道221号線を隔てて標高200mの台地となり、鳥越遺跡、鳥井原遺跡などの縄文時代の遺跡が分布する。最近発掘調査された縄文時代の遺跡では、様屋敷第1遺跡の東南約600m、高崎川の右岸の北向きの傾斜地でバイパス建設に伴い昭和63年度に発掘調査された海蔵寺遺跡が新しい資料として上げられる。海蔵寺遺跡では縄文時代後期の円形及び椭円形の住居跡が4棟検出されている。住居跡の検出された縄文時代の遺跡としては、ほかに柏ノ木遺跡²¹があり、ここでは方形の住居跡が1棟検出されている。また、晩期前半の遺跡としては、北追遺跡、栗巣上原遺跡²²がある。

弥生時代の遺跡については、発掘調査によって明らかになった遺跡は少ない。そうした中で、朴木遺跡²³は県内でも初見になる弥生時代の石蓋土壙墓11基、しかもその1基には磨製石器24本の多くが検出され、注目されている。

江戸時代の遺跡の発掘調査例は、未だにないが、平安時代から中世にかけては越州窯青磁碗が出土した政所第2遺跡²⁴、掘立柱建物跡を検出した下原遺跡²⁵があり、いわゆる歴史時代の考古学的成果の積上げは、文献的な資料整理と共に今後に待つしかない。



第2図 手捏ね土器実測図



第3図 遺跡分布図 (縮尺 1 : 25,000)

1. 様屋敷第1遺跡
2. 様屋敷第2遺跡
3. 海藏寺遺跡
4. 高崎城跡
5. 烏井原遺跡
6. 烏越遺跡
7. 烏越前遺跡
8. 仮屋尾遺跡
9. 日守地下式横穴墓群
10. 池山口遺跡
11. 下朝倉遺跡
12. 上所迫遺跡
13. 源太遺跡
14. 栗須第2遺跡
15. 栗須遺跡
16. 青木遺跡
17. 柏ノ木遺跡

第3節 発掘調査の経過と概要

様屋敷第1遺跡では、いわゆる夜臼式から板付式の突帯文の鉢形土器片と有文の壺形土器片が検出されている他古墳時代の格縄突帯文の壺形土器片が出土しているが、それらに伴う遺構は検出されておらず、遺構及び遺物の中心は江戸時代の建物跡の柱穴、土坑、井戸などとそれに伴う陶磁器片である。

以下、発掘調査の経過について調査日誌の抜粋で記す。

様屋敷第1遺跡（1988年）

- 8月1日 表土剥ぎ開始。
8月2日 地面までは1層で、整地と判断され、南に向かって傾斜している。南部分の整地土層から刻目突帯文土器片出土。
8月3日 柱穴群検出。石灰による表示、後写真撮影。柱穴から「寛永通宝」出土。
8月5日 柱穴の掘立柱建物跡の検討。20分の1の実測のための水糸等の設定作業。
8月16日 最終的な精査。実測図のレベル入れ。

様屋敷第2遺跡（1989年）

- 2月27日 表土剥ぎ作業。
2月28日 格縄突帯文土器片など土師器片が出土するが、まだまとまりはみられない。
3月1日 重弧文土器片出土。ボラ層上面の掘下げ。
3月2日 土層セクション実測。
3月3日 調査区南端で半分削平された住居跡を確認。掘下げ、土器量は少ない。

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 様屋敷第1遺跡

1. 遺構

第1遺跡において確認された遺構は、土坑、掘立柱建物跡、井戸等すべて近世期のもので、遺物のみられる縄文時代等の遺構は検出されていない。

調査区のはば中央に掘立柱建物跡がみられ、その東側に土坑及び井戸跡が検出されている。この内の土坑には厚い焼土の形成がみられる。これらの位置関係及び遺構の性格から、掘立柱建物跡から土坑そして井戸跡にいたる部分は有機的に機能した遺構とみられ、すなわちドマ、カマド、イドという調理場所との位置付けが与えられる。

また、掘立柱建物跡の西側に、正方形と長方形を組み合わせた格好の土坑内の両側に、四個の石を配列した遺構が検出されている。

a 掘立柱建物跡

基本的には、桁行3間梁行2間の掘立柱である。さらに東側に2分間、柱穴2穴分延び、カマドとみられる土坑がその縁に位置することになるが、西側の3間2間の建物とは柱間の寸が異なる。しかし、一体として機能していたとみられることから、この建物の構造は複雑である。

中心の掘立柱建物跡については、「考察」において詳しく触れるが、桁行の柱間の間隔は、当初2mで企画され、出来上がりは1.8mに変更されているが、梁行の尺度は2mが基本で作られている。さらに東に2分間延びる柱間の間隔は1.6mである。これは、やはりドマとカマドとの機能面で、意識的に工夫された建築の構造とみておきたい。

b 土坑

調査区において土坑は、4箇所において確認されている。SC1は、焼土を伴うカマドとみられるが、一辺約1.1mの正方形状の堅穴に不整形の張り出し部が付く。SC2は、配石を伴う土坑で、正方形部の一辺約0.8m、長方形部の一辺約1.2m、短辺約0.6mを計る。SC3は、長辺約2.8m、短辺約1.2mの長方形状の土坑である。SC4は、4基の土坑の切り合いとみられる。

c 井戸

井戸は、直徑約1.2mの円形の遺構である。下部には水の浄化装置とみられる配石がみられる。

2. 遺物

a 縄文土器

遺物で最も古く遡るのは、縄文時代晩期の土器片である。

精製磨研土器としては浅鉢形土器が見られる（第4図1）。その他はいわゆる刻目突帯文土器で、ヘラ状工具による刻み（第4図3～6）と指先による押捺による刻み（第4図7～15）とに分けられる。また精製された壺形土器のヘラ描きによる文様部分（第4図16～17）が出土しており、

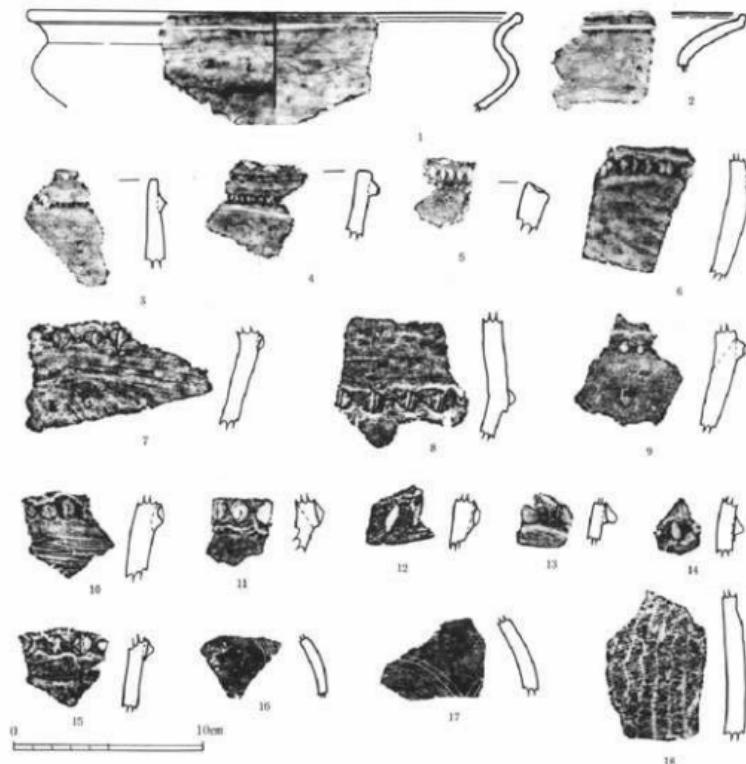
縄文時代から弥生時代への転換を示す資料が確認されている。その他、組織痕土器片（第4図18）がある。

b 陶磁器

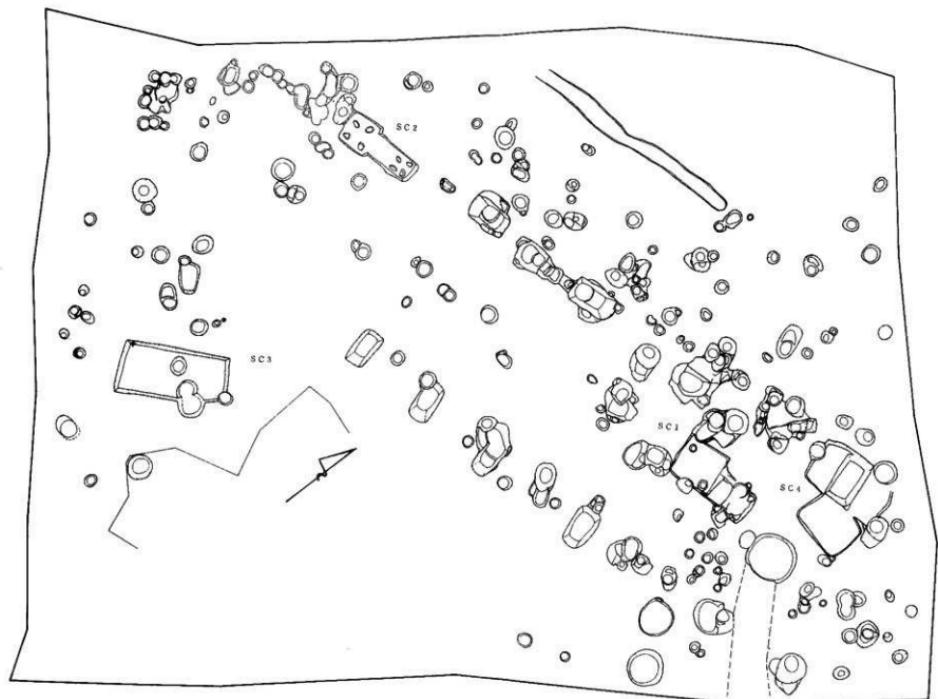
遺物の殆どは、江戸時代の陶磁器で占められる。

磁器で、江戸時代初期まで（16～17世紀）の製品は、中国製の染付（第10図1）がみられるぐらいで、他は江戸時代後期のものである。

18～19世紀初頭までの肥前系の製品では、染付碗（第10図2～11）、白磁碗（第10図12）、染付猪口（第10図13・14）、白磁小坯（第10図15）、白磁小碗（第10図16）、染付皿（第10図17～21）、青磁香炉（第10図22）などがある。この内、白磁小坯（15）は18世紀に収まるものとみられる。



第4図 縄文土器実測図(1)



第5図 造構配置図(1)

肥前系以外では、瀬戸美濃の皿（第10図23）がある。

幕末頃までの肥前系の製品では、染付碗（第10図24～26）、白磁碗（第10図27）、仏飯器（第10図28）がある。

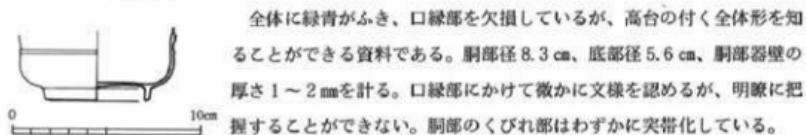
肥前系以外では、瀬戸美濃の仏飯器（第10図32）、関西系の鉄絵碗（第10図29）、土師器小壺（第10図31）などがある。

第11図1～9は、幕末から明治時代にかけての製品で、6は型紙刷りの製品で明治10年以降に下り、3は瀬戸美濃系の銅版転写赤絵の製品で大正時代に下る資料である。

第11図10以下は在地製とみられる陶器で、碗（第11図10～21）、皿（第11図22・23）、そして宝珠の付く蓋（第11図27～34）が多くみられる。26の蓋は、土師質の製品で、糸切りの跡を明瞭に残している。

他の器種としては、壺（第12図2・3）、急須（第12図6）、擂鉢（第12図7・8）などがある。

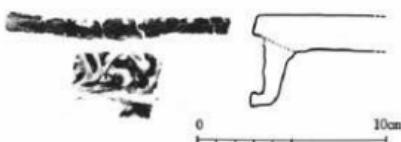
c 銅碗（第6図）



第6図 銅碗実測図

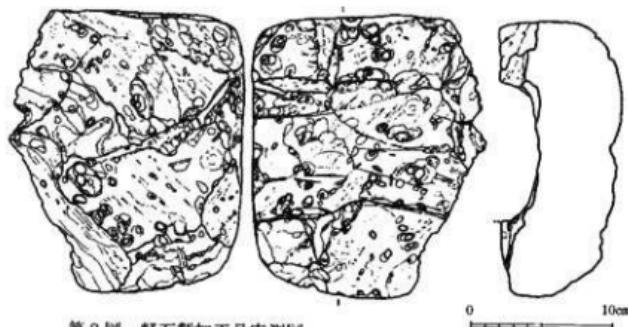
d 瓦（第7図）

軒平瓦片である。厚さ2cmを計る。



第7図 瓦実測図

ほか、柱穴から「寛永通宝」が出土している。また、残存する大きさで20×16.8cmの大きさの内側が抉られた軽石製の加工品（第8図）があるが用途などは不明である。



第8図 軽石製加工品実測図

第2節 様屋敷第2遺跡

1. 遺構

a 包含層の状態

遺跡は南向きの傾斜地であるため、表土及びⅡ層の客土層小礫混入黒色土層は南へ厚く堆積しているが、Ⅲ層の約14cmの享保元～2年（1716～1717）の噴火を起源とする新燃岳スコリアから平均的な厚みをもって堆積している。弥生時代の遺物が包含されるのは、ボラ混入黒色土層上面で、豊穴住居跡はそこからボラ層にかけて掘り込まれている。

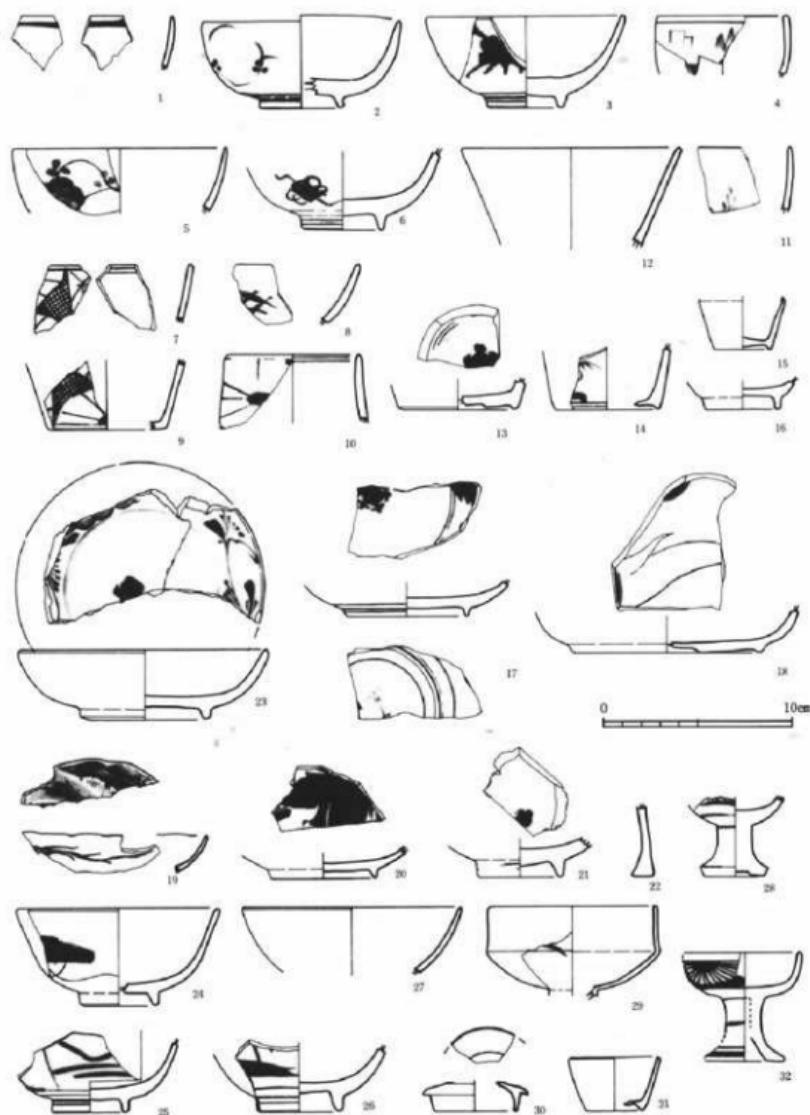
b 豊穴住居跡

第2遺跡では、第1遺跡にみられた近世の造構は検出されず、農道予定地の南端において、半分がすでに破壊された弥生時代後期の豊穴住居跡が1棟認められたのみである。

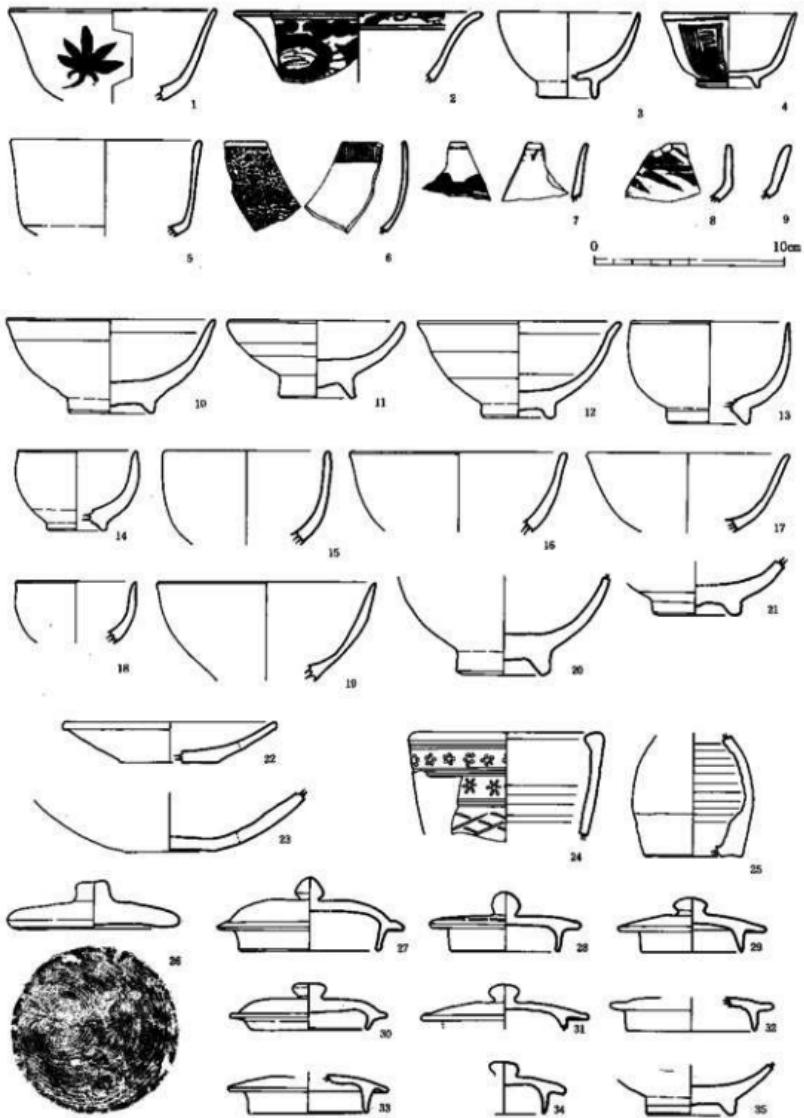
豊穴住居跡は、一辺3.4m以上を計る方形を呈し、検出面から深さ約14cmで、柱穴は残存部では1箇所のみの検出であるが、2本柱の構造であったと判断される。



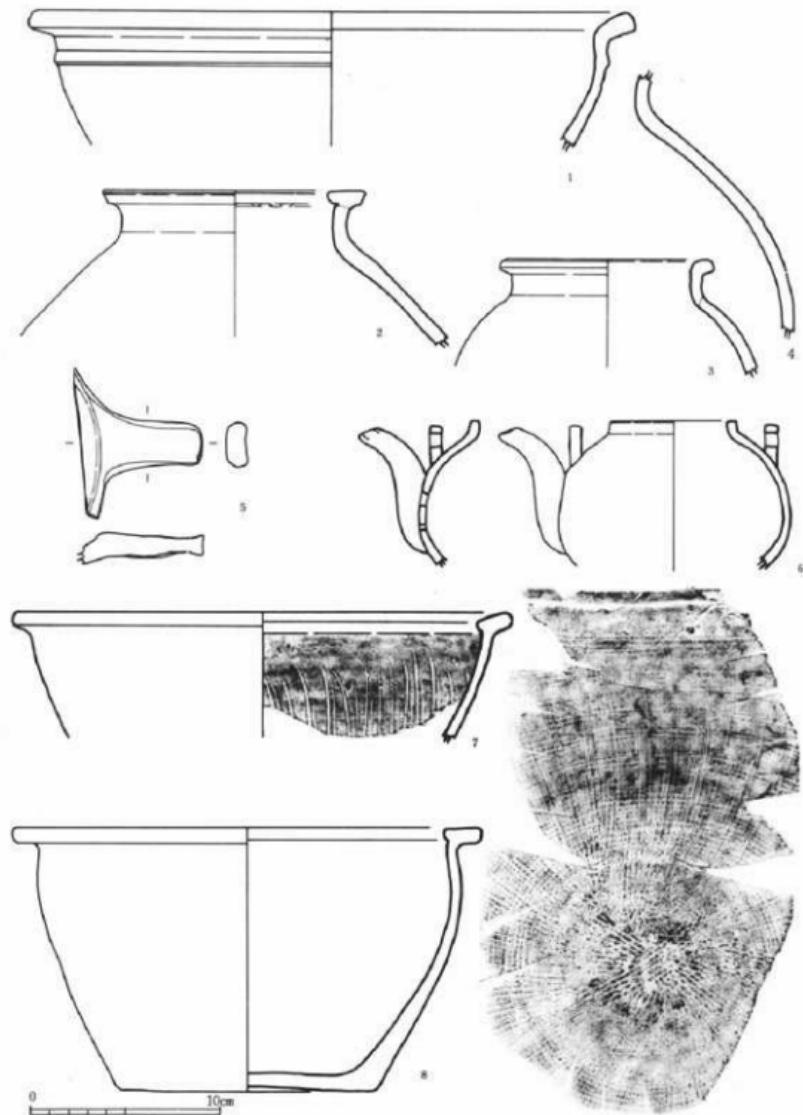
第9図 土層実測図



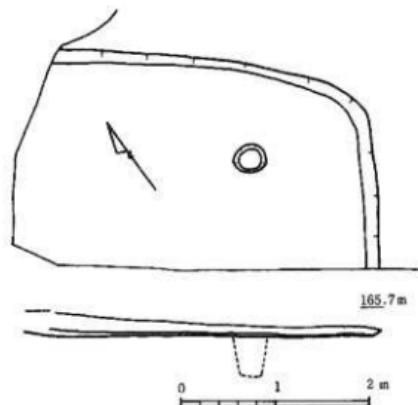
第10図 陶磁器実測図(1)



第11図 陶磁器実測図(2)



第12図 陶磁器実測図(3)



第14図 壺穴住居跡実測図

2. 遺物

a 繩文土器

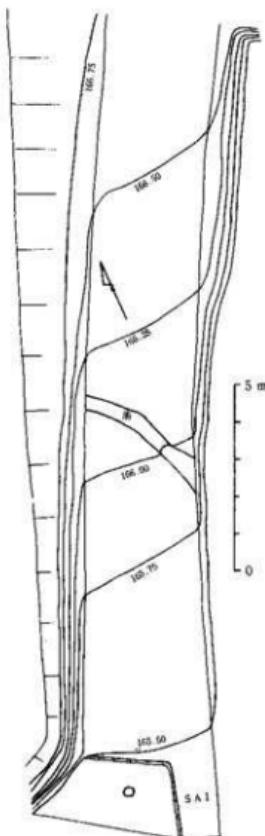
縄文時代晩期の刻目突帯文土器片（第15図）が、少量ながら出土している。Iには、貫通しない孔列がみられる。またいずれの刻みも大まかな作りである。

b 弥生土器

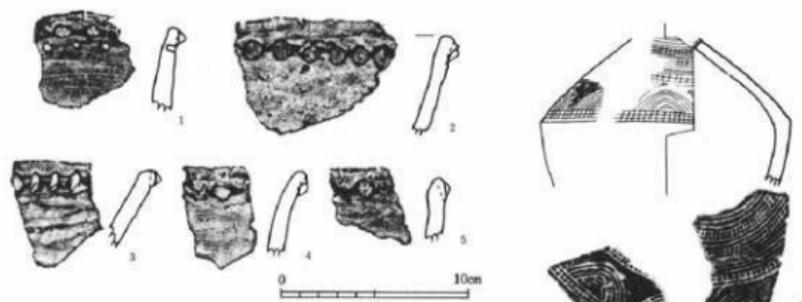
ほとんどの良好な資料は、壺穴住居跡出土であるが、住居跡外からも小型の重弧文土器（第16図1）と壺形土器（第16図2）が出土している。重弧文の弧は、7重を基本としている。重弧文土器の胸部最大径は13.4cm、壺形土器のそれは11.4cmを計る。住居跡の出土土器は、床面直上からの一括資料としてとらえることが出来る土器群である。壺形土器は、胸部最大径26.3cmの重弧文土器（第18図1）で、9重の弧を単位として作られている。

壺形土器は、口縁部推定径25.5cmの大型（第18図6）と同じく15.4cmの中型（第18図9）がみられる。大型の壺形土器は、いわゆる絡繆突帯文をもつものである。高壺形土器は、口縁27.3cmの坏部が「く」形に屈折するタイプ（第18図2）と同じく15.9cmの坏部の深いタイプ（第18図4）の2種が出土している。

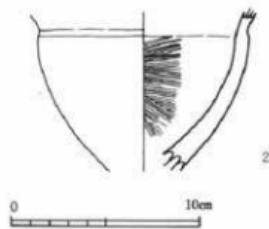
ほかに、23×19.6cm、厚さ8.7cmの石皿（第17図1）及び全長15.5cmの砥石（第17図2）が出土している。



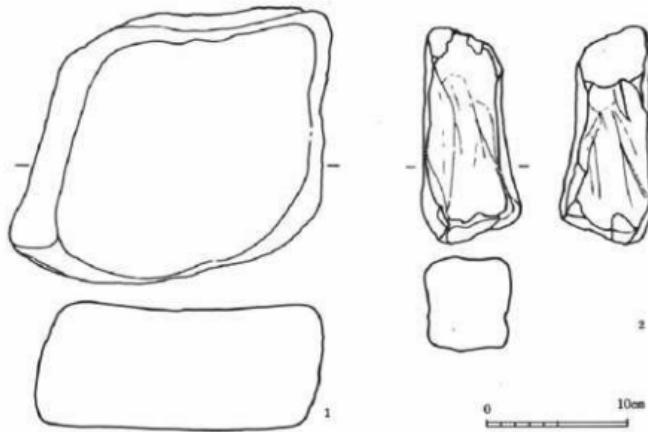
第13図 遺構配置図(2)



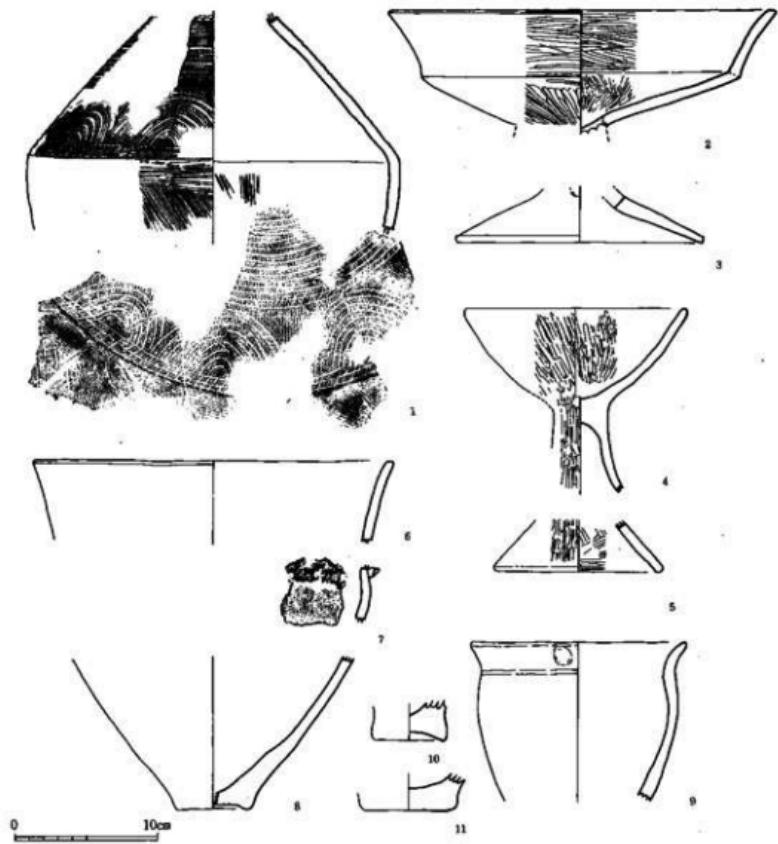
第15図 繩文土器実測図(2)



第16図 弓生土器実測図(1)



第17図 石器実測図



第18図 弥生土器実測図

表 1

固有 番号	植物 名	種類	部品	文様及び調査		構成	色調		基土	備考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
4 1	SHEET	透板	口縫 一 縫接	ヨコ方向のいのないヨコ ヨコ方向のいのないヨコ ヨコ方向のいのないヨコ	ヨコ方向のいのないヨコ ヨコ方向のいのないヨコ ヨコ方向のいのないヨコ	良好	透明(7.5YR 3/2) によい透明 (7.5YR 4/3)	オーリーブ(10Y R 2/3) 透明(7.5YR 4/3)	透明板を含む	
4 2		透板	口縫 一 縫接	ヨコ方向の(風化)	ヨコ方向の(風化)	*	良(N 5/1) 透明(7.5Y R 2/3)	透明(10Y R 2/3)	0.5 mm程の黒く光る粒 1mm内の白い粒を多含む	
4 3		山根 一 新規	口縫 一 縫接	ヨコ一突起 ナデ、網目 ヨ ヨコ一突起 ナデ、網目	ヨコ一突起 ナデ、網目 ヨ ヨコ一突起 ナデ、網目	*	透明(7.5Y R 3/2) 透明(7.5Y R 5/6)	透明(10Y R 5/4)	2mmの大粒1mmの光る粒 白い粒を含む	
4 4		山根 一 新規	口縫 一 縫接	ナデ	ナデ	*	透明(7.5Y R 5/6) によい透明(10Y R 6/3)	透明(10Y R 2/6)	細かい粒・透明な粒を含む	
4 5		山根	口縫	ナデ	ナデ	*	透明(7.5Y R 5/6) によい透明(7.5Y R 5/4)	透明(5Y R 5/2)	1.5 mm程の粒を含む	
4 6		新規	口縫	ナデ	ナデ	*	透明(10Y R 7/6)	透明(10Y R 7/6)	白の透明板、黒・うす茶 などの2mmの大粒や砂粒を多 含む	
4 7			*	ヨコ、斜め方向のナデ 並み目突起	ヨコ、斜め方向のナデ 並み目突起	*	によい透明(7.5Y R 7/4)	によい透明(10Y R 7/3)	白色に光る粒、黒・うす茶の1 mm以下の砂粒を含む	
4 8			*	表面より上ヨコナデ 下はナデ 並み目突起	ヨコナデ	*	によい透明(7.5Y R 7/4)	によい透明(10Y R 6/3)	白色に光る粒、黒・うす茶の1 mmの大粒、砂粒を含む	
4 9			*	ヨコ、斜め方向のナデ 並み目突起	斜めのため不明	*	によい透明(10Y R 7/4)	によい透明(10Y R 7/4)	白・黒・茶・うす茶の2mm の粒を含む	
4 10			*	表面のヨコ方向の斜線板 並み目突起	ナデ	*	透明(5Y R 6/6)	によい透明(7.5Y R 7/4)	1mm以下の黒・白・白色透明 の粒と、黒く光る、3.5 mm程 の底色の粒を含む	
4 11			*	ヨコ方向のナデ 並み目突起	ナデ	*	によい透明(7.5Y R 7/4)	透明(10Y R 6/3)	白く光る粒、うす茶の細砂粒を 多含む	外表面樹脂下に八 字型枠
4 12			*	ヨコ方向のナデ 並み目突起	風化のため不明	*	によい透明(10Y R 7/4)	によい透明(10Y R 7/4)	白く光る粒、黒・うす茶・白な どの細砂粒を含む	外表面樹脂下に八 字型枠
4 13			*	ナデ 並み目突起	ヨコ・斜め方向のナデ 並み目突起	*	透明(10Y R 4/1)	透明(5Y R 6/6)	白く光る粒、うす茶・灰色の細 砂粒を含む	
4 14			*	ヨコ方向のナデ 並み目突起	風化のため不明	*	透明(2.5Y 8/4)	透明(2.5Y 8/4)	黒・白・光る粒 黒・うす茶などの細砂粒を含む	
4 15			*	ヨコ方向のナデ 並み目突起	ヨコ方向のナデ 並み目突起	*	によい透明(10Y R 7/4)	透明(2.5Y 8/4)	白く光る粒、黒・うす茶・白な どの細砂粒を含む	
4 16			*	ヨコ方向のミガキの 上に一部縫合文様	ナデ・糸継多い!	*	透明(2.5Y 8/6)	によい透明(10Y R 7/2)	白く光る・うす茶・黒・底の粒 の粒を含む	
4 17			*	ヨコ方向のミガキの 上に一部縫合文様	ナデ	*	によい透明(10Y R 5/3) 透明(10Y R 4/1)	透明(2.5Y 7/2) 透明(2.5Y 5/1)	白く光る・白・黒の細砂粒を含 む	
4 18			*	透明板	ナデ	*	透明(2.5Y 8/2)	透明(2.5Y 7/3)	黒く光る・黒・うす茶の細砂粒 を含む	内面にチャスス 付着

表 2

固有 番号	植物 名	種類	部品	文様及び調査		構成	色調		基土	備考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
15 1		口縫 一 縫接	ヨコナデ ヨコ方向の乳孔 山根内凹目突起	ヨコナデ	良好	透明(7.5Y R 6/6)	によい透明 (10Y R 7/4)	0.5 ~ 2mm程の白・黒・透明の 粒、1.5 mm以上の黒く光る粒を 含む		
15 2		口縫 一 縫接	ヨコナデ ヨコ方向の乳孔 山根内凹目突起	ヨコナデ	*	透明(7.5Y R 4/1)	透明(7.5Y R 4/3)	0.5 ~ 1mmの白・黒・透明で光 る粒、黒く光る粒を含む		
15 3		口縫 一 縫接	ヨコナデ ヨコ方向の乳孔 山根内凹目突起	ヨコナデ	*	透明(10Y R 4/1)	透明(2.5Y 8/4)	0.5 ~ 2mm程の白・黒・無色透 明で光る粒、黒く光る粒を含む		
15 4		口縫 一 縫接	ヨコナデ ヨコ方向の乳孔 山根内凹目突起	ヨコナデ	*	透明(10Y R 4/2)	透明(10Y R 4/1)	1mm以下の黒・白・白の粒 を含む		
15 5		口縫 一 縫接	ナデ	ナデ	*	透明(1.5Y R 7/6)	透明(2.5Y 8/6)	黒く光る粒を含む		
			ヨコ方向の乳孔 山根内凹目突起	ナデ	*	によい透明(5Y R 7/6)	透明(2.5Y 4/1)	2mm以下の黒・白・白の粒 を含む		

表 3

固有 番号	植物 名	種類	部品	文様及び調査		構成	色調		基土	備考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
16 1	生	強筋 強筋 下伏	強筋文と強筋の上に組み合 けた内凹の上にナデの 裏地文、組合のナデ	ナデ	良好	透明(10Y R 8/4)	透明(5Y R 6/3)	1mm以下の白・黒・白の粒、 無色透明・白・黒・光る粒を 含む		
16 2		強筋 強筋 下伏	ナデ	ヨコ方向のハケ目	*	によい透明(7.5Y R 7/3)	によい透明(7.5Y R 7/3)	ナデの白・黒・透明に光る粒 を含む		

表4

回数 番号	遺跡名	形態	特徴	文様及び調査		施成	色調		基準	備考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
16. 1	S A I 墓	附 面 一 面	全体タテ方向のヘタリ。表面 は黒褐色、1面の裏面は、2面 の表面の上に施成有り。	表面には、2面めの 施成下位、タテ方向 のハサギ。	白計 にぶい (7.5Y R 8/3)	にぶい (7.5Y R 8/3)	にぶい (7.5Y R 8/3)	にぶい (7.5Y R 8/3)	1~3mm の白色の粒 1~3mm の灰、うす茶の粒を 含む	
16. 2	x	高耳 付脚	上位 ヨコ方向のヘタリガタ 上位 ヨコ方向のヘタリガタ、下位 タテ方向のヘタリガタ	x	洗黄地(7.5Y R 8/4) 白	洗黄地(7.5Y R 8/4)	洗黄地(7.5Y R 8/4)	2mm前後の白、灰、黑色の粒 白色透明で光る粒、無色光る粒 を含む		
16. 3	x	脚 部	ナデ	x	白(7.5Y R 7/6)	白(7.5Y R 8/4)	白(7.5Y R 8/4)	2mm以下の白、灰、黑 黒く光る粒を含む		
16. 4	x	脚 部 口唇 口唇 口唇	タテ方向のヘタリガタ ヨコ、タテ方向のヘタリ 脚部 ヨコナデ	白 ヨコ、斜方角のハケ ナデ	明赤地(5Y R 6/6) 白(3Y R 6/8)、に ぶい実地(10Y R 7/4)	白(5Y R 6/6) 白(3Y R 7/6)	白(5Y R 7/6)	0.5~1.5mmの白、透明の粒、透 明で光る粒、黒、茶の颗粒を含 む		
16. 5	x	脚 部	タテ方向のヘタリガタ ヨコナデ	ヨコ、斜方角のハケ ナデ	白(7.5Y R 7/6)	白(7.5Y R 7/6)	白(7.5Y R 7/6)	2mm以下の白、茶、無色透明で 光る粒、白の透明の砂粒、4mm 大的の粒を含む		
16. 6	x	脚	ヨコナデ	ヨコナデ	x	にぶい実地 (10Y R 7/3)	洗黄地(10Y R 8/4)	2mm以下の白、茶、無色透明の 粒、無色透明で光る粒、黒く光 る粒を含む		
16. 7	x	脚 部 詰み合せ場	ヨコナデ ナデ	ナデ	x	洗黄地(7.5Y R 8/3)	白(7.5Y R 7/6)	*		
16. 8	x	脚 部	ナデ	ナデ	x	にぶい実地(5Y R 5/3) 白(5Y R 7/8) 灰白(5Y R 8/2)	白(5Y R 7/6)	*	内、外側ともに 一般スリ行者	
16. 9	x	口 唇 口唇	ナデ、口唇器に施成之	ナデ	x	白(7.5Y R 7/6) にぶい実地 (10Y R 7/4)	白(5Y R 6/6)	2~3mmの白、黒、茶、黒の粒 白色透明で光る砂粒 を含む	内、外側ともス リ行者	
16. 10	x	底 部	タテ方向のナデ	ナデ	x	にぶい実地 (7.5Y R 7/4)	洗黄地(10Y R 8/4)	2mm以下の白、茶、無色透明の 粒を含む		
16. 11	x	x	ナデ	ナデ	x	にぶい (7.5Y R 7/4)	洗黄地(7.5Y R 8/3)	2mm以下の黒、茶、白色透明の 粒を含む		

第Ⅲ章 考 察

第1節 縄文時代

遺構に伴うものではなかったものの、縄文時代の遺物として注目されるのは、いわゆる夜臼式系の刻目突帯文土器である。

刻目突帯文土器は、古くは日之影町布平出土が知られるにすぎなかったが、近年では学園都市遺跡群の前原北遺跡⁽¹⁾の出土で注目され始め、端的には、鹿児島県における縄文時代晚期遺跡の集成の成果によって知られるように、以来かなり広がりを持って南九州の地域において「再発見」されるようになった。宮崎県下においては、串間市唐人町遺跡など広範囲な分布を示すようになってきた。

その中でも高崎町という内陸部の地理的位置は、重要な意味を持つものといえる。また、断片に過ぎないが壺形土器片が出土していることも注目される。第1遺跡のみならず第2遺跡においても認められたことから、周辺に中心的な当該期の遺跡が存在すること強く印象付ける。その場合、縄文時代晚期から弥生時代前期の過渡期における水田耕作という、一つの重要な要素についていえることは、遺跡の立地の周辺環境において触れるように、高崎川から両岸の台地までの沖積地に広い可耕地を求めないことである。夜臼式・板付式土器が、土器という即物とその背後に抱えもつ「文化」の実態は、まだ通か彼方で見ることができない。

第2節 弥生時代

ここでも極めて特徴的な土器が出土している。第2遺跡の竪穴住居跡及び周辺から出土した重弧文土器で、弥生時代後期に於ける地域間交流史を象徴的に示す資料である。

祭祀性の強い土器として理解されるが、竪穴住居跡という日常生活空間出土という状況も注目に値するであろう。

県内の住居跡から重弧文土器の出土は、確実には高城町城ヶ尾遺跡⁽²⁾及び小林市水落遺跡⁽³⁾からの出土が知られているのみで、代表的には野尻町大荻遺跡⁽⁴⁾で知られるように土壙墓など埋葬施設に伴う特異な性格を持つ土器である。熊本県地方から大淀川上流から、さらに下流域へと広がる過程において向内陸部での土器の持つ性格の変質が問題とされてこよう。

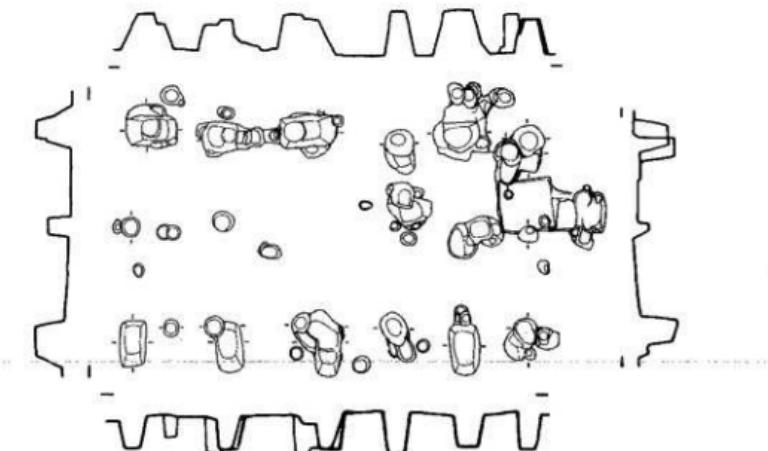
第3節 江戸時代

第1遺跡において検出された遺構は、江戸時代後期後半に位置するものである。ドマ、カマド、イドといった連闇を示す柱穴、焼土を伴う土坑、井戸が検出されている。その中で、極めて特徴的であるのは、 1.5×1 mの長方形状の掘り方の柱穴で構成される掘立柱建物跡の存在である。こうした規模の柱穴は、時期を異にするが、皆見の範囲では国分寺跡の食堂あるいは僧房と推定される建物跡にみられるのみで、県内において最大級のものである。

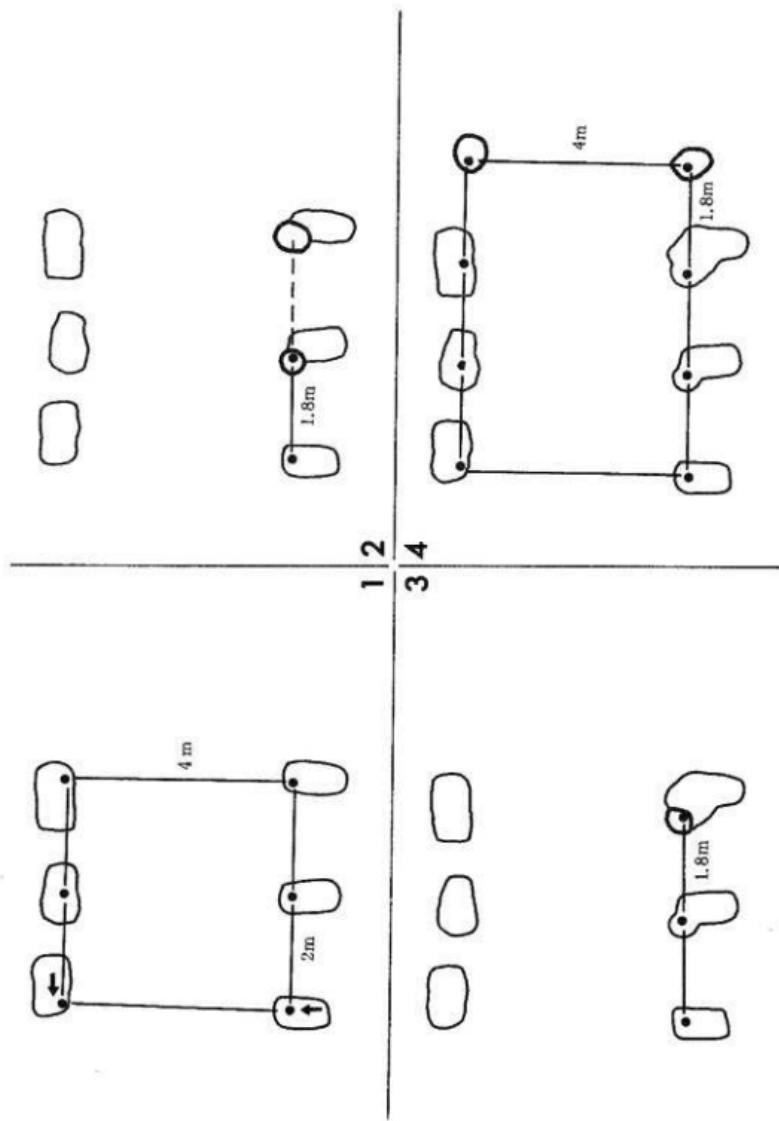
直線上に5～6個の柱穴が並ぶとみられるが、柱間間隔から南から4個の柱穴を一つの建物単位として考えたい。

柱穴の長方形の掘り方は、軒の両サイドで方向が異なり、その検討により掘立柱建物の建築方法の復元が可能である。西側軒での柱穴は桁方向に並び、東側軒での柱穴は桁方向に直行する方向で並列する。また、南から3個の柱穴が長方形で最後の1個が円形である。このことから、まず、大きく長方形の掘り込みを行い、3本の柱が立った所で最後に位置関係の決まった円形の柱穴が掘り込まれるとみるべきであろう（第20図1）。この時点では、柱間間隔は、2mを基準に設計されていたとみられる。しかし、掘り込みの現場と建築用材の切り込みとの行き違いからか、柱間間隔が1.8mに変更される。西側は桁方向に調整可能に長方形に掘り込まれているが、東側は直交方向であるため調整の範囲がなく、南から2番目の柱穴では一個コブ状に柱位置が変更される（第20図2）。しかし、3番目の柱穴は2mから1.8mへの変更によって、一個のコブの変更では足りず、さらに一個コブ状に変更される（第20図3）。こうして、3柱が決定することによって、建物の方向は決定されることになり、仕上げに最後の円形の柱穴が掘り込まれることになる（第20図4）。

柱の建てる順序、方向も推定可能である。東側では、柱は東方向から柱穴に据えられ建てられる。一方、西側ではまず南端の柱穴から、柱は北方向から柱穴に据えられ建てられて行くはずである（第20図1の→）。



第19図 掘立柱建物跡及び柱穴実測図



第20图 挖立柱建物跡建築工程推定図

付 章 木場城跡堅堀の調査

第1節 調査に至る経緯

木場城跡は、高崎町大字縄瀬字中尾に位置する中世の山城である。北諸県郡農林振興局において林道建設が計画され、堅堀への影響について協議をした結果、影響範囲を極力押さえることで林道の位置を下げ、やむを得ず影響を受ける部分について発掘調査を実施した。しかし、幸いその影響は实际上も末端部の若干を削る程度であったため、逆に調査としては形の整わないものとなっている。

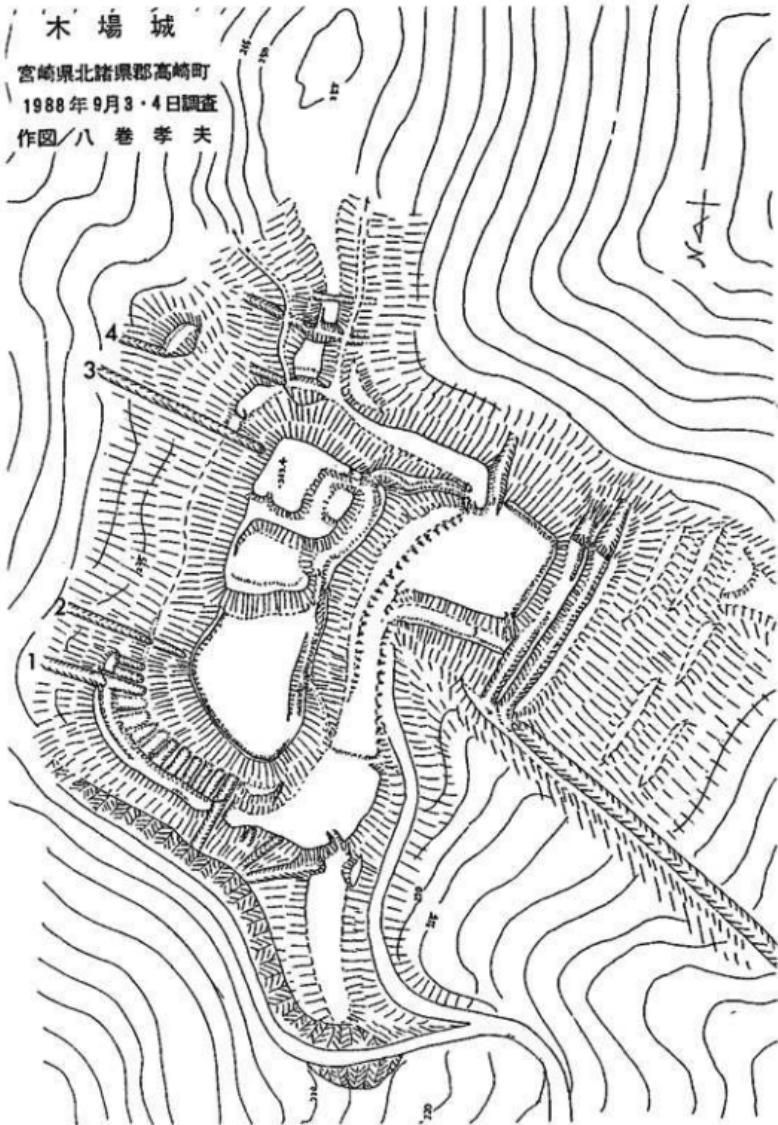
第2節 遺跡の概要

「木場」城は、厳密には仮称としておくべきである。この山城を最初に「木場城」に比定したのは『日向地誌』での平部雄南であった。それ以前で確実な根拠となるべき文献は存在しない。

しかし、町教育委員会の依頼を受けて縄張り調査をされた八巻孝夫氏によって、歎状空堀群の存在が確認され、同遺構の南限を示したこと、俄然注目される山城となった。



第21図 木場城跡位置図



第22図 木場城跡縄張り図及び調査地点図

第3節 調査の結果

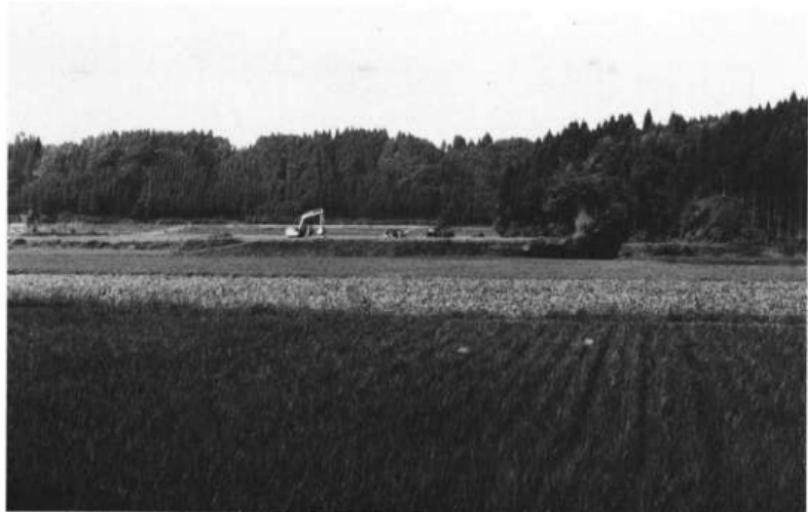
堅堀の影響する部分についてのみ調査を実施した。北から第1～4と便宜的に呼ぶが、第2・4は微妙に堅堀の末端をとらえたに過ぎず、斜面の斜距離にして3m程度の影響を受けた第1・3堅堀で幾つかの所見を得ることが出来た。

まず、気付かれたのは、第1堅堀を埋めた新燃岳スコリアとみられるスコリアの存在である。新燃岳スコリアは享保元～2年（1716～1717）の噴火を起源とする。八巻氏の推定する城の築造時期は、元亀初年（1570）ないしは慶長5年（1600）の何れかとされるので、この火山噴出物は築造時期の決定に貢献するものではないが、少なくとも100年程のち堅堀の上面を埋めるスコリアの存在には頗るるものがある。

第3堅堀は、この山城の立地する丘陵の基盤を成す岩盤を、堅堀の末端を形成するために削ったとみられ、厳しい築城技術の在り方を見る思いがした。

註

- (1) 岩永哲夫「柏ノ木遺跡発掘調査報告」「宮崎県文化財調査報告書」第16集 1972年
- (2) 面高哲郎「北迫遺跡発掘調査報告書」「宮崎県文化財調査報告書」第26集 1983年
- (3) 茂山謙「栗原上原遺跡」「九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書」(3) 1980年
- (4) 未報告 「高崎町文化財調査報告書」第1集を参考
- (5) 面高哲郎「高崎町東鶴島出土の輸入陶磁器」「宮崎考古」第6号 1980年
- (6) 茂山謙「下原遺跡」文献(3)と同じ
- (7) 北郷泰道他「前原北遺跡」「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書」第4集 1988年
- (8) 鹿児島県考古学会「鹿児島県下の縄文時代晚期遺跡」 1988年
- (9) 未報告
- (10) 長津宗重他「城ヶ尾遺跡」高城町文化財調査報告書第1集 1989年
- (11) 長津宗重他「水落遺跡」小林市文化財調査報告書第1集 1990年
- (12) 石川恒太郎他「大荻遺跡」(1) 1974年
- (13) 八巻孝夫「南九州の扇状空堀群の城」「中世城郭研究」第3号 1989年



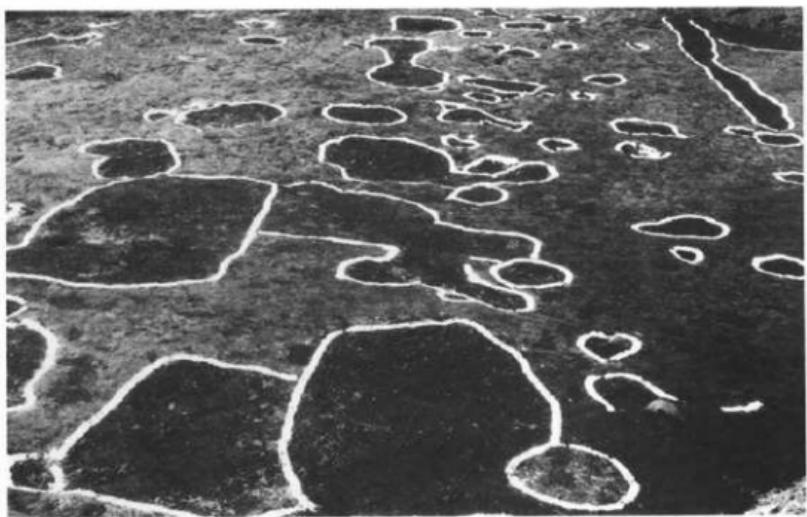
様屋敷第1遺跡遠景



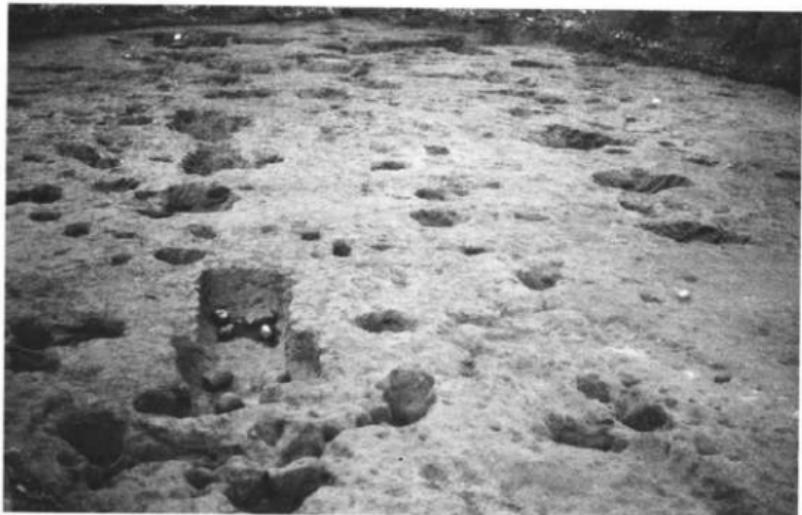
様屋敷第1遺跡調査風景



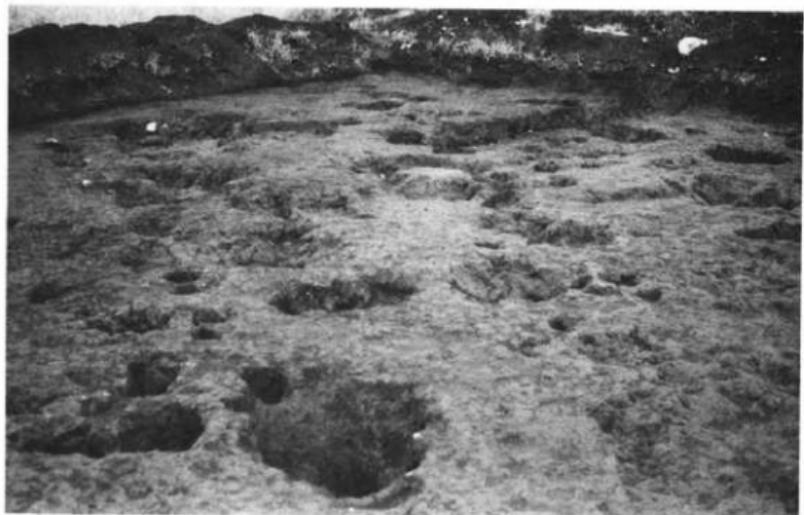
遺構検出状態遠景



遺構検出状態近景



遺構掘り上げ状態（掘立柱建物跡等）



遺構掘り上げ状態（土坑等）

掘立柱建物跡東柱穴列



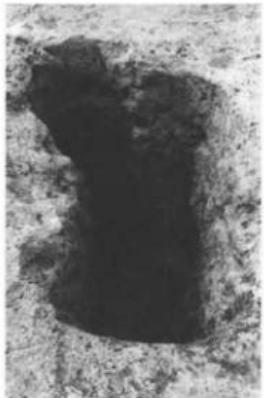
掘立柱建物跡西柱穴列



掘立柱建物跡東柱穴列



掘立柱建物跡西柱穴列





SC2 検出状態



SC3 検出状態



SC 1 及び焼土検出状態



SC 4 検出状態



SC 4 陶磁器一括出土状態（遠景）



SC 4 陶磁器一括出土状態（近景）



様屋敷第2遺跡遠景



様屋敷第2遺跡近景



土層の状態



遺物出土層の状態



竪穴住居跡及び遺物出土状態



竪穴住居跡検出状態



木場城跡第1堅堀検出状態



木場城第3堅堀検出状態



上 第8図 軽石製加工品

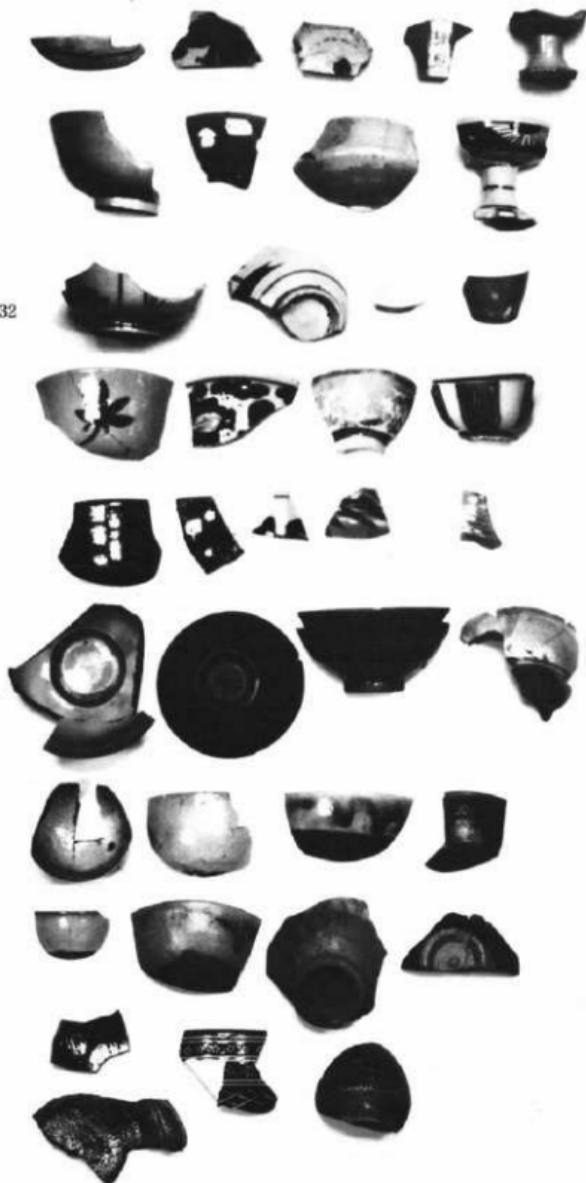


左 第4図 繩文土器



第10図 1~18、23
陶磁器

第10圖19~22、24~32
陶磁器

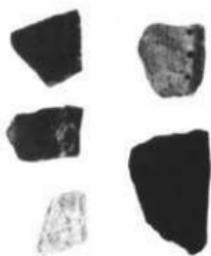


第11圖1~25
陶磁器

左 第11図26~35
陶磁器



上 第12図陶磁器

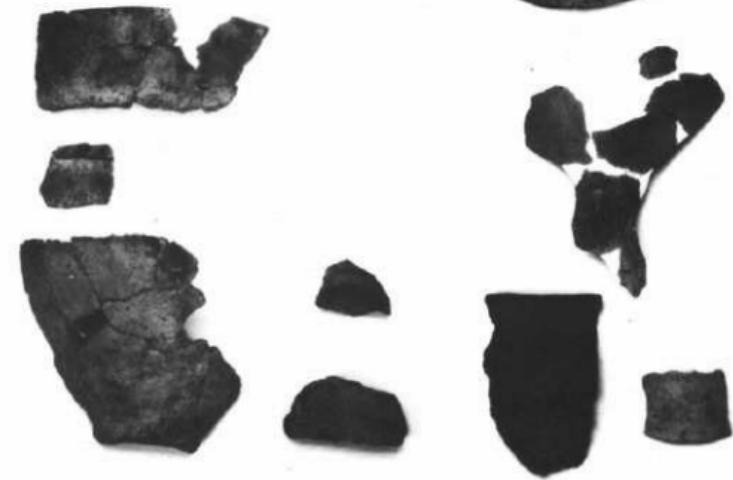


上 第15図繩文土器

右 第16図弥生土器



下 第18図弥生土器



高崎町文化財調査報告書

第 2 集

様星敷第1・2遺跡

木場城跡

発行年月日 平成2年3月31日

発 行 宮崎県北諸県郡高崎町教育委員会

印 刷 桐原文易堂

宮崎県都城市東町1-8-1

電話 (0986) 22-1121